

医師生活20年



小岩克至

さくら皮フ科
(藤沢市)

2017年5月に湘南藤沢の地に『さくら皮フ科』を開業してもうすぐ6年が経とうとしています。

ご挨拶が遅れまして大変申し訳ございませんでした。

2023年5月を迎えると医師免許を取得し丸20年が経過します。医師生活20年というアニバーサリーイヤーに、この度シリーズ開業の執筆の機会をいただきました。

諸先輩方から『20年なんてまだまだ!』とお叱りを受けるかもしれませんが、私の拙い医師生活20年を振り返り、ここに綴りたいと思います。少々お付き合いください。

私は2003年に愛知医科大学を卒業後、横浜市民病院で2年間研修を行いました。当時はまだスーパーローテートが義務化されていない時代でしたが、医師として短期間でも各科の知識や経験を積んでから専門科へ進みたいと思い、スーパーローテートを採用している横浜市民病院を研修先を選びました。ここが地獄の一丁目だとも知らずに……。

いざ研修がスタートすると開始3ヶ月後から救急当直は独り立ち、私を含め同期は3人のため当直は3日に1回、今のように研修医の労働環境が整備されていないので、当直明けも深夜まで各科の業務……慌ただしい1日が過ぎ、疲れて帰宅するのは病院の目の前の寮のため救急車のサイレンがひっきりなしに聞こえる……そんな24時間落ち着かない2年間でした。でも、医師とは仕事とはそれが当たり前なのだと思っていました(後に他施設で研修した先生のお話を聞いて、普通ではなかったことを知りました)。

その2年間の研修の中で私の大師匠である故毛利忍先生が指揮を執る皮膚科を研修でまわりました。

ここが地獄の二丁目……。

毛利皮膚科は毎週水曜日の18時頃から魔の病理カンファレンスが始まります。終わる時間はなんと深夜25時……。毛利先生の下で修業する皮膚科医2名と私の計3名が6～7時間徹底的に皮膚病理を学びます。とは言っても私は研修医。病理組織なんて医学部2年生の時に適当に細胞をスケッチした記憶しかありません。ですから皮膚科初心者の私にはチンプンカンプンで聞いたことのない言葉が飛び交います。毛利先生から『ほら。そこにジデロファージがいるでしょ』と言われモニターに映し出された組織を見ますが、そもそもジデロファージという単語自体初めて聞く言葉ですので、どの細胞のことを言っているのかわかりません。カンファレンスが終わってから知らないことを調べなおし勉強する毎日でした。皮膚科研修の終盤では私にも発表する機会を与えてもらえました。もちろん皮膚科研修前に皮膚病理の教科書を購入していましたが、今のように豊富に日本語の皮膚病理の教科書がある時代ではありません。上級医2名の先生方の発表を聞いていただけに、その1冊では毛利先生に太刀打ちできないことがわかっていました。悩んでいたところ毛利先生が『あれに詳しく載っているよ。読んでみたら』と言われ、指をさされた先にあったのはLEVERでした。LEVER……一介の研修医には荷が重すぎる……。説明する画像を素早くモニターに映し出せる自信がないので、メルクマールのため医学部2年生以来のスケッチをしたりして、どうにかこうにか発表の準備をしました。その日の私の発表は脂漏性角化症とBowen病。脂漏性角化症は何度も上級医の先生方の説明を聞いていたこともあり自信があったのですが、毛利先生から『なんでPseudo horn cyst

はPseudoと言うの?』と質問されました。『なんで?』って? 教科書の写真とまったく同じ絵づらなんですけど……(心の中の声)。Bowen病では自信満々に『ここに異常核分裂像を認めます』と説明したところ、毛利先生から『何をもって異常と判断するの?』と質問されました。想定範囲外。普通そこ質問します? 何をもって異常とするかなんて教科書に書いてなかったもの。さすが大師匠、すべてを見透かして、中途半端な知識であるともっと踏み込んだ勉強をなさいと私は遠回しに指摘されたのです。『本当に頭のいい人(その道を極めていいる人)はそこまで見えているのだ。この先生にはかなわないな』と思いました。

当初私は形成外科医になろうと思っていたのですが、毛利先生の下で皮膚科研修をしたことにより『診断もできて手術もできる皮膚科医になろう』と決意しました。

そして2年間の研修が終わり横浜市立大学皮膚科学教室に入局。地獄の三丁目です。

研修医上がりにありがちなことですが、2年間臨床を経験したことにより多少の自信を覚えます。しかし、何一つ皮疹が診られないことに打ちのめされました。当時は胸痛や腹痛を診察する方が得意で、皮疹に関しては水いぼでさえ自信がありません。自分の知識のなさ、実力のなさに滅多打ちにされました。これもまた地獄……。できない自分が許せないタイプなので、隈なく皮疹を観察して本気の皮膚科学の勉強が始まりました。

またそこでは手術の大師匠である故和田秀文先生に出会えました。なんと和田先生も毛利門下生です。『手術もできる皮膚科医になろう!』なんて目標を掲げたものの、執刀したことなんてありません。まず和田先生の外来手術の介助に入らせていただくこ

とで、メスの使い方から縫合の仕方まで、手術のいろはを学びました。病棟担当のときには中央手術室で悪性腫瘍の植皮術や切断術、皮弁術、壊死性筋膜炎のデブリードメントと様々な手術を執刀させていただきました。和田先生には本当に多くの手術を経験させていただき感謝しています。

実は和田先生の本当の偉大さに気付いたのは関連病院に出向したときです。一人で手術をするとき、やることは変わらないはずなのに大学病院でやる時のような安心感がない。あれだけたくさん手術をしてきたのだから自信はあるはずなのに。“はっ”と気がつきました。和田先生だ。和田先生が後ろにいてくれたから安心してメスを入れることができたのだと。

まだ医師生活数年しか書いておりませんが、話が長くなってしまいましたので、結びに入りたいと思います。

私は自分のことを『けっこうやるじゃん!』と思ったり、『本当にまだまだだなあ……』と思ったりしています。間を取って『まあまあ』だとしましょう。

そうだとすると私の経験は実は地獄ではなく、正しい医師への、正しい皮膚科医への道程だったのです。

魔のカンファレンスは真のカンファレンスだったのです。

現在私は医局を離れ、湘南藤沢で地域医療に奔走しています。

毛利先生、和田先生、私は先生方の教えを守り正しい医療ができていますでしょうか?

先生方に誇れる医療をしていきたいと思います。お二人で美味しいお酒でも飲みながら弟子の活躍を見守っててください。

わたしの開業奮闘記



加藤円香

茅ヶ崎 mamaクリニック
(茅ヶ崎市)

2007年に鳥取大学を卒業後、実家近くの島根県立中央病院で初期臨床研修をしました。鳥取大学皮膚科に入局し結婚、夫の転勤で群馬大学皮膚科に入局、その後夫の実家がある神奈川県茅ヶ崎市に転居しました。2016年に恵比寿、2020年に茅ヶ崎に皮膚科のクリニックを開業しました。医療法人を立ち上げ、恵比寿院は知り合いの先生に任せ、わたしは理事長兼茅ヶ崎院の院長になりました。

開業奮闘記というと、開業当初は大変だけれど後に順風満帆となった、といった話が多いと思いますが、まさにその通りです。

恵比寿、茅ヶ崎と開業し、2つのクリニックを経営しました。一度クリニックを立ち上げていると、2院目はとても楽に感じます。手順を踏んでいるので、コンサルタントはなく、全て自分で開業出来ました。もちろん税理士さんや司法書士さんにアドバイスを貰いつつ、医療法人関連の問題は全てお任せしました。什器や医療機器も仲介業者（コンサルタント）が介在しないと安価に仕入れる事が出来ませんでした。

恵比寿院は保険診療を行う皮膚科としては立地が悪く、患者さんはあまり増えませんでした。医師（わたし）1人、看護師1人でやっていく事はそこまで大変ではありませんでした。しかし、わたしの妊娠、出産が開院してから4年の間に2度あり、その間は他の先生にお願いするしかありませんでした。やはり、医師を雇うとなると人件費が跳ね上がります。その点でなかなか厳しい経営状況にありました。

そんな中、住まいがある茅ヶ崎でクリニックを開業したいと以前から考えており、物件を探していたところ、とても良い物件の話がありすぐに契約しました。流石に恵比寿院の経営状況が悪く、なかなか融資がおりませんでした。なんとか融資もおり、クリニックを開業することとなった2020年、新型コロナウイルス感染症が猛威を振りました。クリ

ニックは2階建ての戸建てで2階はフリースペースでした。そこを休校になったスタッフの子ども達の学童保育のスペースにしました。それはそれで安心できる勤務環境だったかなと思います。「コロナ禍での開院で大変だったんじゃないの？」と聞かれることが多いのですが、スロースタートがとても良かったです。15時になるとみんなでお茶をするという、今ではなかなか考えられないことも可能で、スタッフと往時を懐かしんでいます。

現在、スタッフ8名の内、常勤4名、ほぼ常勤3名、パート1名です。開業からいるスタートメンバー5人は誰1人辞めることなく、プラス3人で8名になりました。稀に後輩の医師に手伝いに来てもらいますが、ほぼわたし1人で診療しています。スタッフに関連したストレスが無く、本当に有難く感じます。スタッフ其々に個性があり、誰1人欠けてはならない存在になっています。ミスやクレームがあった場合、どのように改善していくか、売上をあげるためにはどんなメニューを加えるのかなど相談し、皆で作ってきたクリニックだと感じています。

よく患者さんに「家のことはどうされているんですか？」と聞かれる事があります。4人の子育てをしながらというのはなかなか大変です。思春期に足を突っ込んだ中学受験を控える小学6年生の長女、習い事など何もしたまらない、おばあちゃん、お母さん大好きな小学3年生の長男、やんちゃという言葉では表せないくらいの6歳の次男、自分は何をしても許されるやりたい放題の4歳の次女。仕事の合間に買い物をしてくれ、先に家に帰ってご飯を作りながら、私の話を聞いてくれる精神科医の夫。夫がいてくれるからこそ成立するわたしとクリニックです。感謝してもしきれません。保育園生活がまだまだ続きますが、4人目が小学生になって1人で学校の行き帰りをしてくれるのを待つばかりです。とは言えあつという間の子育て、後悔しないよう子どもと関わって見守っていきたいです。

結局、恵比寿院はお任せしていた医師の開業希望があり、2021年に閉院しました。それまでは私も月2回、恵比寿院で診療していましたが、閉院することにしてかなりホッとしました。2つのクリニッ

クを運営する事は大変でしたし、恵比寿院に充分関与出来ていない罪悪感もありました。今後は恐らく、茅ヶ崎のみでしっかり地域医療を支えていきたいと思えます。

そうだ、開業しよう！ ～西横浜物語～

2021年11月に横浜市西区藤棚町（西横浜）で開業しました。

2001年に東邦大学医療センター大橋病院皮膚科に入局し、2010年から1年間、横浜労災病院で勉強する機会を頂きました。

2012年に皮膚科専門医を取得後は、専門医資格を維持すべく実家や在宅クリニックでの勤務を続けながら、育児・家事をほぼワンオペ（大学勤務の夫→戦力外）で行っていました。

一人娘が医学部をめざすようになってからはコロナ禍での受験となり、サポートが大変で、自分のことはおろそかとなり勉強不足、新しい知識から遠ざかっていきました。2021年を迎え受験のゴールが見えてきた頃、ハッと自分自身のことを考えるようになりました。

娘が毎日10時間以上も勉強しているのに、自分は医局や横浜労災病院で培った知識や技術がどんどん損なわれている、新しい治療も経験が無く、経験する場も無いと悩むようになりました。しかし、学位もなく、これといった専門分野もない身で今から大学病院の医局に戻るのも難しいし、病院でバリバリ働く自信もなく……この先の皮膚科医としてどう生きるかを考えたときに、突然ひらめきました。

「そうだ、開業しよう！」

いつからどこで、と考えるうちに思い出したのが1年前に聞いた「おさく皮膚科（尾作文先生）が移転される」という話でした。同じ場所で皮膚科を開業できる医師を探している、との話を人づてに聞き、自宅から近く良い話と思ったのですが、その頃はコロナ禍の真っ只中、受験生の娘のことを最優先にし

ていましたので、とても開業準備などできるわけがないし……。今回は縁が無く残念だなあと諦めていたのですが、もしかしたらまだ後継の医師が決まっていなかもと早速、話をもってきてくださった開業支援の方に連絡をとってみると「まだ決まっていない」と返事があり、最短の半年というスケジュールで開業することを決めました。

この時点では家族や勤務先など誰にも伝えておらず、まずは夫に「私、開業しようと思う」と話したところ「ふーん、いいんじゃない」と他人事のような返事で本気と思われていない様子でした。「で、いつ開業するの」「半年後、今年の11月」「え……」としばし絶句したのち「いくら何でも早すぎる」と猛反対され「俺は協力しないからな」と言い渡されました。おそらく私が開業すると今までノータッチだった家事の分担や、自分の夕食などに支障がでると思ったのでしょう。しかし皮膚科の学力に不安のある自分としては、夫の協力は私の開業プランには必須で、「じゃあいいよ、頼らないから！」とタンカを切ってはみましたが、心の中では「根は優しい人だから、何だかんだいっても最終的には協力してくれるはず」と思っていました（実際その通りで感謝感謝です）。

開業前は「これから新しい皮膚科の疾患や治療などを勉強していこう」と意気込んでいたはずなのに、開業後はこれほどまでに人事、労務、税務など医学と全く関係のないことに時間を費やすことになると思ってみませんでした。神奈川の皮膚科の先生方は皆様とても勉強熱心で、このような診療以外の雑



福田美和

福田皮ふ科クリニック
（横浜市西区）

務をこなしながら凄いなあと改めて実感しました。

それでも周辺の基幹病院のおかげで、何とか1年間やってこられたと感謝しております。

生まれも育ちも浜っ子ですが、医局が東京でしたので繋がりが薄いことも開業の際に不安でしたが、医会等でも皆様がとても気さくに接して下さり、また出身大学や医局は異なりますが、フェリスの先輩方が多くいらっしゃり、この地で開業できて本当に良かったと思っています。私が診療のわからないことなどをメールした時も、皆様大変お忙しいはずですのですぐにご助言くださったり、資料をくださったりと助けられてばかりで、まだ何もお返しできておりません。また、私の開業の1年前まで開業されていた尾作先生が患者様ファーストの診療を

行っていたらよかったおかげで、通院されてくる患者様は皮膚科ができたことを喜んでくださり、尾作先生との信頼関係が深かったことがわかります。尾作先生の作り上げたものを壊さないように努力しなければと痛感しています。

まだ、神奈川の先生方のお顔とお名前が一致しないことも多々あり、失礼があるかもしれませんが、今後ともご指導のほどよろしく申し上げます。

今回「シリーズ・開業」のお話を頂き、開業準備から開業後1年の様々なトラブルやハプニングを書こうと考えていましたが、開業前までの話で終わってしまいました。今後また機会を頂戴いたしましたら続きをご報告したいと思います。

“ふつう”の町の皮膚科を目指して

2021年10月1日に相模原市の矢部で、ももせ皮膚科を開院しました。

私は2001年に北里大学を卒業し、そのまま北里大学病院皮膚科に入局しました。様々な病院で経験を積ませて頂く中で皮膚科勤務医の重要性を感じ、特に入院治療による全身管理にやりがいを持っていました。しかし何度か体調を崩し、医局も離れたところで開業を決意しました。保険診療主体の“誰でも気軽に通える皮膚科クリニック”にしたいと思い、物件探しを始めました。そこで皮膚科クリニックがすでにあちこちにあり、隙間がないことに気づきました。思っていた以上に開業のハードルが高いことに焦りながら、いろいろ考えつつ、待ちつつ、諦めずに物件探しを続けました。この間、運良く新宿で雇われ院長のポストに恵まれました。ここでスタッフ管理の大変さ、クリニック経営に関わる金銭管理やその方法など、今まで全く知らなかった業務を経験することができました。

開業の決意から約2年たった時にJR横浜線矢部駅南口の目の前の1階という、これだという物件を



百瀬葉子

ももせ皮膚科
(相模原市)

見つけて即決。融資を取り付け、物件の契約、内装の設計や工事、各所への届け出、スタッフ選定と事前研修などなど、初めての事ばかりで右往左往しながら多くの方々のご協力を得て、約4ヶ月の短期間で開院にこぎつけました。こだわったのは、患者さんの待ち時間短縮のために業務を効率化することで、院外からの順番取りシステムを導入し、カルテ入力を行う診療補助の事務スタッフを配置、診察室2部屋と処置室1部屋を用意して私とスタッフが移動しやすいように動線の工夫をしました。

診療のコンセプトは、皮膚科の中でも専門性を持たず、美容機器もない、いわば特徴のない“ふつう”の皮膚科です。ただ、保険診療内で出来る治療や検査は極力やろうと、腋窩多汗症に対するボトックス注射、皮膚生検や小さな腫瘍の切除、陥入爪のガター法、金属パッチテスト、抗生剤の点滴の準備をしました。

これで近隣の皆様に喜んで頂けるのか、スタッフに楽しんで仕事をしてもらえるのか、当初は不安でした。開業後よりとてもありがたいことに近隣の

方々を中心に多くの患者さんにご来院頂いています。クリニックの運営が安定してきたところで、電子カルテと連動した自動釣り銭機とキャッシュレス決済を導入、その後、全スタッフの協力のもとアトピー性皮膚炎に対するデュピクセント治療を行えるところまできました。診療補助に入る事務スタッフが金銭面の相談を、看護師が自己注射や外用治療に関する相談を受け、クリニックのメンバー総動員で対応しています。ご多分に洩れず当院もスタッフ問題を抱えておりますが、中心メンバーには恵まれて安定した診療を維持できております。

当院から徒歩7分程度の所に渕野辺総合病院があるのですが皮膚科医が不在で、昼休みの時間を利用して入院患者さんの往診の依頼を受けるようになりました。そこで“開放型病床”のシステムがあることを知り、帯状疱疹入院パスを作成、内科医師を始めとする病院スタッフの皆様のご協力を得て、当院より直接入院治療を受け入れて頂けるようになりました。入院後も病棟で診察が可能で、以前より入院治療を得意としてきた事が生かされとてもやりがいを感じております。

クリニックのロゴはオリーブです。私はクリスチャンなので聖書の一節よりデザインしました。オリーブは旧約聖書の中の“ノアの箱舟”に関するところ



で出てきます。オリーブは平和の象徴であり、ほかにも信仰上、様々な特別な意味を持つことに加えて、オリーブ油は古代より皮膚病を始めとする様々な病気の治療に用いられてきました。オリーブのバックの黄色はオリーブ油を、茶色の円はノアの箱舟を表しています。患者さん、クリニックそして地域の平穏な日常が守られるよう、願いを込めました。

今後、皮膚科の先人が積み上げて下さった診察と外用治療を主体とした技術を大切にしつつ、時代のニーズの変化をとらえられるように常にアンテナを張り、新しいことにも積極的に取り組み、その時その時に順応した“ふつうの皮膚科”であり続けていきたいと思っております。

